

サノックスの目安箱 「コロナと私」



第 018 号 2020 年 8 月 20 日 山田寛

私とマスクとディスタンス

私はもともと人のコミュニケーションを重視して生きてきたつもりでした。

数十年来、花粉症に悩まされても、できるだけマスクをせずにやってきました。ジャーナリスト、教員と、人と話すことが大事な仕事をしていて、あんな“半月光仮面”(古い例えで恐縮)みたいな格好では、話し難いと思っていたからです。

米国に駐在していた時、通りですれ違った相手が自然に「ハロー」と言葉をかけ、スマイルをくれる。いいなと思いました。日本人は普通無表情なのに。一方、例えばパリの街で日本人観光客などとすれ違うと、ここまで来て日本人に会いたくないとでもいう様に、距離をとり、目も合わせない様にする人が結構多く、変な感じでした。

ところがコロナ、コロナで今やマスクは必携になり、ソーシャル・ディスタンスが大事と盛んに言われています。慣れてみると、マスク生活も無精ひげなど全くそらなくもOK、気楽で悪くないものですね。

でも今は逆に、電車や店の中などでマスクをしていない人や、レジ前で距離を保たない客などと出会っただけで、つい厳しい目で見つめてしまう自分がいます。外で人と話すのも少なくなってくる。このままコロナ禍が長く続けば、私も、日本社会全体も、「心のディスタンス」をさらに広げ、定着させてしまうのではないかと、今それが心配になっています。

山田寛 (法務省難民審査参与員・元嘉悦大学教授)